
トロピカルナイト

絵爾久万

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トロピカルナイト

【Nコード】

N2779D

【作者名】

絵爾久万

【あらすじ】

朝起きると何かが違っていた。眼に映るすべては昨日と何も変わりないのに、美咲の意識の中で何かが大きく変化していた。美咲と晃成の記憶が交差する。そして：

Blue darkness

Blue darkness

I wonder if it's like a dream
or a mirage:

I would sink all which happened
on those days to the deepest
water.

Everything would be swallowed
by the sea so... nothing happened.

When I realized I was alone, I
lost everything.

Now I'm here. I am here with
myself.

その日の朝は昨日までの朝と違っていた。

いつものようにカーテンから射し込む光の筋も、光を反射させたく
すんだベージュ色の壁も、携帯のアラームクロックの音も、アラ
ームのオフボタンを押す私の指も、昨日までのそれらと何ひとつ変わ
りなかった。

しかしその日の目覚めは、明らかに昨日までの目覚めとは違ってい
た。

私は人を殺したのだ。

昨日までの自分とは明らかに違う。

私は人を殺した。殺人者としての目覚め。昨日までの自分は殺人を犯していない一般人。一般人でいるときの自分は、殺人者をひとくりにしゲッターのような境界の中に住む別人種だと錯覚していた。そして決してその中には入れない。そこに入ることができるのは殺人者という人種のみ。

そう思っていた。しかしいったんゲッターの中に入りこんでしまったら、その壁は実は穴だらけで、外界との明確な区切りはないに等しい。つまりその中に存在していたのは嘗てすべてが殺人を犯したことのない一般人だったという当然すぎる滑稽な理由。

：私は再び目を閉じた。

目を閉じ、当然次にやって来る記憶の呼び戻しを待った。しかし脳内のシナプスは何かの障害でニューロン同士を上手く繋げることができない。殺人という、ある一部分の記憶に関してのみ。

殺人と言う短編については鍵が掛かった状態。つまり私は人殺しに関してのコンテンツを読むことができない。殺人者という極シンプルな装丁以外は。

：これは夢か？

夢とは明らかに違う。私は明らかに殺人を犯したと言う現実的な強い記憶を持っていた。

一体全体どうなっているのか。私は人を殺した筈なのに、いつ、どこで、誰を殺したのかまったく記憶がない。例えば何か物を取りに別の部屋に行き、何を取りに来たのか思い出せない。確かに必要なものを取りに来たのだがその実態がどうしても思いだせない。そん

な感覚に似ている。

方法は何か、相手が誰なのかはまったく分からないが、殺した瞬間の相手の表情はよく覚えている。正確には覚えている：：というのとは少し違うような気もする。

相手が死ぬ瞬間の、怯えや、驚き、絶望、悲哀：そんなすべてのマインスのエネルギーを記憶しているのだ。殺された者と殺した者の感情がその瞬間強く一致し共鳴したのか。それは相手の感情だったのか、自分自身の感情だったのかは曖昧としている。

本当に人を殺し、一時的な記憶喪失状態にあるとし仮定したら：私は人を殺したが、実際数分前に自分の家のベッドの中で目を覚まし、いつものように起き上がり、平然とここに居る。

と言うことは私はまだ逮捕をされていない。と言うことになる。

警察がまだ犯人を断定できてないのか、私の犯した犯罪がまだ発覚していないのか。それとも私が狂っているだけなのか。

とりあえず会社に行くことにした。充分間に合う時間だった。私は簡単に食事を済ませ、身支度を整えて家を出た。

いったい私は誰を殺したのか：。友人？恋人？家族？見ず知らずの他人？

夢ならだいたいこの位でやはり夢だったんだと気づいてもいい時刻だろう。しかし私の殺人者意識は霧の中に薄れるどころが、厳然と記憶の中に色濃く立ちはだかっていた。

会社に着くと同僚の季梨香が驚いた顔で私を見て言った。

「あれ？美咲、今週いっぱい休みじゃなかった？」

「今週いっぱい？」

「どうせ明日も明後日も休みなんだから、無理して出てこなくてもよかったんだよ。どうせ12月のメンテリスト届くのは月曜か火曜なんだから。ところでもう大丈夫なの？メールの返信もないから死んでるんじゃないかって本気で心配してたところよ。今日あたり美咲の家行こうかって思ったの。とりあえず元気でもよかった」

「あ、うん……」

私は言葉に詰まった。

「熱は下がったの？」

「うん」

「気をつけないとね。私は毎年予防摂取受けるから安心よ。やっぱ受けるべきだよ予防接種と定期的なSTD検査はね」

「私いつから休んでた？」

「え？」

「いつから休んでた？」

季梨香は不思議そうな顔で私を見た。

「大丈夫？インフルエンザウイルスで頭やられた？うーん、月曜に来て営業会議の準備してる最中いきなり具合悪いって帰ったんじゃない？」

「そうだったね……」

「ああ、まだ治ってないよ。無理しないで、具合悪いようだったら帰りなよ」

「うん。ありがと：」

私はインフルエンザで月曜の午前中に早退し、木曜まで休んだ。この4日間にいたい私に何が起こったのか。月曜から今朝起きるまでの記憶が都合よく消されていることになる。高熱にうなされ一時的な記憶喪失に掛かったのか。では、この決して取り去ることのできない鮮明な殺人者としての意識はいつどこからくるのか。考えれば考えるほど、吐き気がして頭が痛くなった。

季梨香に真実を話した所で一笑に付されるに違いない。でもそれ以上にあまりにこの殺人者としての意識が鮮明で、怖ろしくて聞くに聞けなかった。

誰を殺したのか事実を知りたかった。しかし、殺したとしてもそれを知ることへの恐怖もあった。

時間が経つに連れ殺人者としての実感が薄れるどころか濃厚になっていった。

夜の景色が流れていく。街路や建物に電飾を施したクリスマスのデコレーションが、暗闇の中で幻想的に光り輝き流れていった。

帰りの電車の中で突然 we wish your merry christmas：のメロディーが流れだした。ゆっくりとしたオルゴールヴァージョン。この時期にこの曲。混雑した車内でも決して他人の迷惑にはなっていない。

私はクリスマスソングの曲に耳を傾けた。

周囲の乗客の目が私に集中する。私は急いでバッグの中から携帯を取り出した。晃成からのEメール受信だった。

忘れていたのだ。決して鳴ることのなかったクリスマスソング。

受信画面を開いた。

”結婚しよう！”

一行だけのメッセージ。

携帯を両手で抱きしめると、思わず涙が溢れ出してきた。

Blue island

Blue island

I wonder what are you doing right now.

If I closed my eyes, soon I could see the incandescence of the sun and the deep blue sky and the ocean.

I could smell the vivid green of trees and sweat perfume of white flowers.

If I opened my eyes all those are disappeared and everything would be changed immediately.

All I could see is only the computer display.

I wonder what are you thinking right now.

If I tried to reach out my hand,

I could not feel you or I could

i
l
o
v
e

y
o
u

h
o
n
e
y.

i
m
i
s
s

y
o
u

s

y.
Y
o
u

g
o

y
o
u
r

w
a
y,

s
o

I

g
o

m
y

w
a

y
m
o
r
e.

S
o

I
n
e
v
e
r

c
l
i
c
k

t
h
e

b
u
t
t
o
n

a
n

e
a
v
e
m
e.

I
f

y
o
u

f
o
u
n
d

m
y

s
e
l
f

y
o
u

m
u
s
t

l

m
n
o
t

e
x
i
s
t.

I
m
l
i
k
e

a
g
h
o
s
t.

I
c
o
u
l
d

n
e
v
e
r

m
e
t

y
o
u
.

c
o
z

I

P
l
e
a
s
e.

P
l
e
a
s
e.

P
l
e
a
s
e.

o
'
n
t

m
a
k
e

m
e

a
g
o
n
y

a
n
y

m
o
r
e.

D

S
t
o
p

i
t
!

D
o
n
'
t

s
i
n
g

a
n
y

m
o
r
e.

D

n
e
n
g
r
a
v
e
d

d
e
e
p
l
y

i
n

m
y

h
e
a
r
t.

Y
o
u

r

s
o
n
g
s

y
o
u
r

w
o
r
d
s

h
a
v
e

b
e

Y
o
u

s
a
n
g
t
h
e
m
f
o
r

m
e

a
l
o
t.

d
e
a
s
i
l
y

r
e
m
e
m
b
e
r

y
o
u.

W
h
e
n

I

l
i
s
t
e
n
e
d

t
o

J
o
e,

I

w
o
u
l

a
d
a
r
k
n
e
s
s

c
l
o
s
e
d

p
l
a
c
e.

I
k
n
e
w

I

h
o
l
d

m
y

s
e
l
f

a
l
o
n
e

i
n

l
l
y
o
u.

d
n
o
t

k
i
s
s

y
o
u

I

c
o
u
l
d

n
o
t

s
m
e

o m u c h . i ' m g o n n a d r e a m a b o u t
y o u .
g o o d n i g h t !

マリセルは唇をハート型に突き出して僕の耳元で囁いた。

僕は目を瞑りその唇に僕自身の唇を重ねる。しかし彼女の唇は冷たい平面で実際僕はそのやわらかな感触や温もりを感じることができないし、彼女の甘い香りを嗅ぐこともできない。。

g o o d n i g h t h o n e y !

マリセルが僕を見つめて言う。

g o o d n i g h t b a b y !

僕は彼女に言葉を返す。

p e e e e e e e e

突然機械的な信号音が鼓膜を突き刺した。

回線が途切れれば彼女の姿は一瞬にして消え去り、僕は薄暗い部屋にひとり取り残された事に気づく。

僕の目の前に存在するのはパソコンのディスプレイ画面。果てしなく暗い青の色は絶対的に侵入を拒否する100パーセントの二次元世界。そこにマリセルは存在しない。

心という臓器があるなら、それは肉体的質量の多くの比重を占めているように思う。

何故なら空っぽになった心を持つ身体は、重力を受けることもできずに羽毛のようにふわふわと浮遊する。僕はドラッグ常習者さながらすぐにまたマリセルに会いたくなる。

彼女は単なる僕のインターネット英会話の講師：：の筈だった。インターネット回線を介しヘッドセットを通じて、毎晩彼女の口から発音される言葉を耳元で聞いている内に、僕の中で変化が起きた。

彼女が僕の日常生活の所々で出現してくるようになった。会社へ向かう電車の中、会議の最中、街中を歩いているとき、美咲とセックスをしているとき、マリセルはありとあらゆる場所に出現した。夜、ほんの数時間、僕は様々なことを話し、彼女も僕に彼女自身の様々なことを話した。

実際現実世界で出会っていたら、ここまで親密にお互いを理解することはできなかっただろうと思う。

実際僕はプライベートな話しにおいてまで、お互いということん暴露し合った。

彼女の家に別れた元のボーイフレンドが泊まった夜、一晩で10回イッた事があるとマリセルは明け透けに言っただけだ。

僕は負けずに言った。美咲と出会ったころ三度の食事以外の時間は彼女と一日中繋がっていたって。

マリセルはそれを聞いて大笑いをした。そんなに持続力があるのか？って逆に聞かれた。僕はすぐに嘘を付いたことを謝った。彼女の笑いは暫く止まらなかった。

彼女は僕が予約を入れた時間が過ぎてもレッスンを終わろうとしなかった。しまいにはマリセルは僕のことを愛していると言いだした。僕はそれを自然と受け止めた。他にレッスンがないときは何時間も話し、お互いがへとへとになるまで話し続けた。

ある日彼女は滑稽な日本語で僕に言った。

アナタノコトガダイスキデス。

アナタノコトヲオモウトヨルモネムレマセン。

オキヤクサンコンドイツキテクレマスカ？

アナタノコトヲアイシテマス。

僕はそれを聞いて吹き出した。

何を読んでいるのか聞くと、日本人向けバーのホステル用のテキストだと言う。僕はそれには絶句した。しかしそこまでして、僕に気持ちいを伝えたかったマリセルを僕は更に愛しく思った。

僕はマリセルに影響されすぎてしまった。

「寂しくなって私に会いたくなったらこれを聞いてね」
僕はお気に入りフォルダーの中の、マリセルが送信してくれたファイルを開いた。

賑やかな雑音の中で、人々の笑い声や囁し立てる声が聞こえる。言葉は僕の理解の範疇を超えている。音楽が流れ、様々な色の照明が目まぐるしく移動し、やがて光りのプリズムはマリセルの姿を造ります。遠い南の国の僕の知らない世界でマリセルは唄う。

Lying here with you,
listening to the rain.
Smiling just to see a smile
upon your face.
These are the moments
I thank

od that i'm alive
And these are the moments I'll
remember all my life.
I got all I've waited for and
I could not ask for more...

大きな黒い神秘的な瞳。形のいい柔らかそうな口元。長い艶やかな黒髪。ドレスから伸びる二の腕。それらすべては僕を酷く挑発した。僕の中心部は熱く膨張し行き場を失う。目を閉じると、目蓋の裏側に真っ青な海が広がる。僕はマリセルの存在する世界に瞬間移動する。暑い太陽に焼かれ、頭がまどろみ全身が痺れる。そして身体中の水分をすべて奪われる。目蓋を開けると途端に喪失感に囚われる。

僕は独り宙を抱き深い眠りに就く。

chaos

Tremendous kind of race went through in front of me from the right to the left and from the left to the right one after another.

The more space-time would be expanded the more bizarre entropy would be spread. It's like a chaos of a living hell.

Yes, of course I'm one of the member of the world that greedy and cruel.

目の前を雑多な人種が、右から左へ左から右へ次々と流れて行った。時空の広がりと共に増大する奇奇怪怪なエントロピー、阿鼻叫喚のカオスの巷。もちろん私もその貪欲で野蛮な世界に存在している。

こんなことなら、その辺のカフェで待ち合わせをすればよかったと私は後悔した。コーヒーを飲みながら本でも読み時間を潰していれば、こんなにイラつくこともなかった筈。時計の針は待ち合わせ時刻から270度広がった。何度携帯に電話をしても、聞こえてくるのは留守電のアナウンスのみ。

もうすぐ映画始まるし、あいついったい何やってるんだ……。単館上映ものの観たいって言い出したのは見成からだった。なんで私がひとりでこんな田舎ものの集まる人通りの多い場所で、しかも土曜日に

寒さにも耐え、一時間近く立ちっぱでいなきやならないわけ？ 考えれば考えるほど腹が立った。

「すみません。今、手相占いの勉強をしているんです。よろしかったら手相見させて頂けませんか？」

長い前髪を耳に掛けた、痩せぎす色白の気の弱そうな男が近づいて来て言った。

私は聞こえない振りをして、もう一度携帯電話の発信ボタンを押した。これが最後だ。

繋がった。

「あ、はい…」

間抜けな寝ぼけ声が、途切れ途切れの電波の隙間から進入してきた。私は無理やり無駄に過ごさせられた、貴重な1時間の不満を受話器に爆発させた。

「あ…、ああ。だ…だって、い、いま」

返事とも言い訳ともつかない言葉にならない言葉が帰ってきた。私は話の途中で一方的に電話を切った。

隣りに人の気配を感じた。振り向くと、手相占いの痩せぎす男がまだ私の横に立っていた。

「よろしかったら、手相見させて頂けませんか？」

男はさっきより格段に自信ありげに言った。

大きな声でまくし立て、電話を切った私を見ていれば今のこの私の状況がどんなことになっているのか、容易に想像できたに違いない。この男だって恐らく今日一日此処でうろうろしていた筈だ。

気の弱そうな風貌に見えたが結構粘着質なのかもしれない。でも私

は誰でもよかったので頷いてやった。

「いいけど…、いくら？」

意表をつかれたのか男は少し戸惑った顔をしたが、すぐに笑顔を取り繕った。

「ああ、いいですよ。勉強中なんで無料なんです」

「え？ 無料？ 勉強中のあなたにわざわざ時間を割いて手相を見させてやるのに、タダで見せろっていうこと？」

男は真顔になって言葉を失った。その真面目な顔が可笑しくなって私は笑い出した。男もつられたように笑い出した。白いきれいな歯をしていた。人をだますような人間ではなさそうだ。見たところ自分と年もそんなに変わらないようだ。

「手相を見せる代わりに映画に付き合ってくれない？」
私は言った。

「映画？」

「すっぱかされちゃって…」

「ああ…」

「はは・・バツカみたい。チケット2枚持ってるの。期限今日一日だし。一緒に映画を見てくれたら、手相見せてやってもいいよ」

「えっ？ いいんですか？」

前向きな反応だった。

「うん」

「じゃ、ちょっと待って。今、連れに断って来る」

男はそう言って、5メートルほど先の歩道橋の階段の下で立っていた髪の長い中年女の所に走って行き、何かしばらく話をしていたが、すぐにまた戻って来た。

「ひとりじゃなかったの？」

「うん。同じ修行中の身のおばさん」

「へえ…。そうなんだ。いいの？」

「大丈夫、大丈夫」

私は名前も知らない見ず知らずの占い師と映画館に向かった。

やっと探し当てた映画館は中心部から離れたマンションの一階。気をつけて探さなければ絶対に見つけることができそうにない小さな映画館だった。

上映される映画は『フライボーイズ』第一次世界大戦下のフランスを舞台に、中立の立場を貫く連合軍に加勢したアメリカ人パイロットたちの活躍を描くアクション映画。

映画を見た帰り私たちは駅の近くのカフェでコーヒーを飲んだ。

「なかなかいい映画でしたね。僕は好きです。ああいう映画。プロペラ機の空中戦闘シーンは素朴だったけどCGっぽくなくてかなり臨場感ありましたね」

「そっか…、そうだよね。あれ俳優さんが本当に空飛んでたんじゃないんだよね。うん。そうだよね」

「作りがすごく決め細やかだったから、そう錯覚しちゃいますよね」
「手に汗握っちゃったもん」

私がそう言うと、占い師はいきなり私の左手を掴んでテーブルの上に乗せ、両手で手の平を広げた。

「本当だ。まだ湿ってる」

私は力ずくで占い師に握られた手を引っ込めた。

「あれ？見せてくれるって言ったじゃない。手相…」

「そうだけど、なんかいきなり…。キモイ！」

「ごめんなさい」

男はそう言って今度は頭を深く下げ素直に謝った。

「僕は手相占いを勉強している金井淳と申します。よろしくお願いします」

「なんで手相なの？」

「うーん、なんだろ。以前ある人に自分の手相を見てもらったことがあるんですけど、それが結構あたっていて、興味を持ったのがき

っかけかな」

「へえ…、あたるんだ」

占い師の話を聞いて私も少し興味が沸いてきた。

「では、よかったら見せてもらっていいですか？」

「うん」

今度は私は自らテーブルの上に左手を載せ手の平を広げた。占い師は私の手を両手で包み込むように掴むと、顔を近づけてじっくりと眺めた。なんだか私は妙に気恥ずかしくなった。

「あなたは子どもの頃に生死に関わるような大きな出来事がありましたか？」

「えっ？ 本当に？ うん、あたって」

「マジで？」

逆に占い師の方が驚いた顔で私の顔を覗き込んだ。

「本当よ。3才の時に肺炎で高熱が出て死ぬ思いをしたって母親が言ってた。私はぜんぜん記憶にないけどね」

「うーん、でも安心して。取りあえずその後は標準的な生命力ありそうだから」

それを聞いてほっとすると同時に、見ず知らずの占い師の話を本気で聞き始めている自分になんだか戸惑いを感じた。

「あなたは人並み以上に感情が豊かな人ですね」

「そうなの？」

「感情が豊かすぎてそのはけ口に苦勞するかも」

「どういう意味？」

「たとえば恋愛関係では、情欲に走り易い傾向はあるんだけど、真の恋愛対象は一本で、とことん愛し続ける傾向にあります」

「そうかなあ…、確かに当たっているような気もするけど、それに当てはめようとすればなんでも当てはまるような気もするし。病気だってそうよ。子どもの頃に誰だって大きな病気をするじゃない？」

「ええ、まあね。信じる信じないはあなた次第ですからね。僕は手相で見た限りの事を言ってるだけだから」

「じゃあ、私の未来を占って」

占い師はまた私の手の平をしばらく凝視した。そして今度は重そうな口調で言った。

「何がどうのってはっきりした事は言えないけど、そんなに遠くない未来に大きな出来事が起きるかもしれないな」

「何？それ」

占い師は眉間にしわを寄せた。

「ごめんなさい。それは申し訳ないけどあまりいい事ではないんだ」

「え？何それ？」

「だから、何が起るか迄はちよつと判りませんが…」

「いやだ…。なんかそんな事聞かされて、それってすごくいやですよ」

「ごめんなさい」

「どうしたらいいの？」

「こうしたらどうでしょう。僕はあなたの手相を定期的に見てあげる事ができます。だからその場で微妙に変わる部分で判断し、できる限りそれを回避できるようお役に立てればと思います」

「そう…」

どこまで信じたらいいいのかわからなくなってきたが、突然そんなことを言われて私はひどく不安になった。

「何かあったらご連絡をください。そしてよろしければあなたの連絡先を教えて頂きますか？」

占い師は言った。

私はメールアドレスを教え、また会うことを約束して男と別れた。

外はもう日が暮れて気温もかなり下がりはじめていた。本当なら今日は見成と映画を観て帰りに食事をし、週末いつもそうしているようにどちらかの家に泊まる予定だった。今日一日私はいったい何をしていたんだろう。

雑多な夕暮れ時の喧騒の中私は虚しい気もちでひとり電車に乗った。

携帯に晃成からのメール着信はない。こんなに無駄な一日を過ごす羽目になったのも晃成のせい。私がいかに感情的になってもう一生会わないだなんて言っただけで電話を切ったのも悪いけど、もともと悪いのは向こう。

だったら向こうからあやまりのメールなり電話なりしてきてくれて当然。なのになしのつづて。このまま別れても彼は平気なのだろうか。

電話を切った時、私はもう本当に終わりにしようって思った。時間が立って冷静になって考えてみれば、晃成のいない生活なんて考えられない。

彼だって私の暴言に一時的に腹を立て、連絡をする気になれないに違いない。私たちの中はそんなに簡単に壊れるものではない。

このまま意地を張っていたら大事なものを失ってしまう。私はすぐに電車を降りて晃成の住むマンションへ向かった。

メールもせずいきなり晃成の部屋のインターフォンを鳴らした。なかなか出てこない。新聞の勧誘か何かと思っているのだろうか。私はしばらく鳴らし続けた。

やっとドアが開けられると、晃成は精彩のない酷く憂鬱そうな顔で現われた。

fear of dusk

The sun went down to the far west and dusk comes up.
Dusk would change its color deeper and deeper.
And then far off west sky dyes its color to vivid red like blood.
The corner of the black world rises.
I am seized with fear that cannot escape.

全身に纏わりつく不快な汗で目が覚めた。太陽の光が遮断されることなく直接ガラス窓から侵入し、室内の温度を上昇させていた。
昨晚カーテンを閉め忘れたようだった。十二月だというのにまるで温室の中にもいるような気分だ。

密閉された部屋の中で臭気が漂っていた。湿った衣類に繁殖した雑菌、排水構から立ち上がるメタンガス、一週間放置した生ごみ、汗、脂、煙草、ティシュペーパーにこびりつき無惨な死を遂げた精子たち……。

それらのものが入り交じり一つの独創的な香りを造り上げていた。これはもう悪臭に近いだろう。しかし僕の唯一くつろげる癒しの香りだ。

白い壁に反射した太陽の光は、その明るさをまた何倍にも増幅させ部屋の中を照らし出した。目を閉じれば目蓋の裏側が真っ赤に反転する。僕は朦朧とした頭で覚醒と睡眠の境を漂った。

突然それを遮断する携帯の着信音。僕はほとんど無意識のうちに受信ボタンを押していた。

「どういうこと？」

美咲の声だった。ひどく苛立っていた。声のトーンでよく判る。

「ねえ、今どこにいるの？ 私待ってるんだけど…」

「待ってる？」

「バカッ！！」

僕の脳細胞は一瞬にして覚醒した。すべての事柄が一瞬のうちにフラッシュバックした。美咲と約束をしていたのだ。時計を見る。約束の時間からすでに一時間過ぎている。

「ご、ごめん。今起きたところ」

「ちょっと、それどういうこと？ 一時間前に約束してたのに今起きたの？ 信じられない」

「ご、ごめん…」

「ごめんって。晃成が行きたいって言い出したんだよねえ？ だから早めに来てあたしチケット買って待ってたのに」

「ごめん。ごめん、ほんとごめん。目覚まし鳴らなかった。ごめんいくら謝ったところで僕の言葉が空回りしているのはわかっていたが、こういう状況では謝る事しか他に方法はない。僕はただひたすら謝った。」

「バカじゃない？ 今日私と約束してたなら、昨日から心の片隅にあるわけでしょ？ ふつう。目覚ましのせいにしないで！ もともとそん

なに来たいわけじゃなかったのよ。晃成、私のことなんか記憶の片隅にもないんだよ。サイテー!!」

「ごめん。今から急いで行く：」

「今からすぐ出るって：一時間掛かるじゃない？私にこのまま更にここで一時間待ってっていうの？」

「すぐ行く：」

「もういい！私帰る。もう来なくていい。終わりにしよ。バイバイ！」

「ち、ちよつと待って：」

電話はそのまま一方的に切られた。

僕は携帯を投げ出しベッドの上で仰向けになった。暫く太陽の光りで照らされた眩しすぎる天井を眺めていた。

天と地が逆さになったらさぞかし楽しいだろう。僕の子供の頃からのひとり遊び。脱ぎ捨てた衣類が一つも落ちていない。

僕は天井の隅から隅へ自由に歩き回ることができる。中央に位置する照明カバーはテーブルに早代わり。これには食器を置きそうになるので花を沢山詰めることにしよう。

しかし、もし天と地が逆になったら部屋中に散乱したすべてのものが、天井に落ちてくることになる。

これも楽しいに違いないが、結局僕は散乱したトラッシュの世界に存在している訳だから、天地が何度引っくり返ろうが、僕はこれらの煩わしいものと決して離れることはできないのだ。

僕はなぜかほっとしていた。

この感情は自分でも理解に苦しんだ。美咲とつき合い始めてから約2年間ほとんど週末は必ずお互いどちらかの家で過ごしていたから、ひとりで独占できる自分の時間は久しぶりのことだった。

美咲の父親は僕の勤務する会社の経営者。一年前の創業記念パーティーで僕は上司から美咲を紹介された。

僕達はその場ですぐに恋に落ちた。美咲は僕を愛してくれた。もちろん僕も美咲を愛した。ふたりの間に障害は何もなかった。B級恋愛映画のサクセスストーリーのような出会い。

通常であれば僕達は愛を育み、やがて結婚し将来的に僕は今の会社の経営陣に籍を置くことができるだろう。

しかし自分の本心に利害関係なしに真実、美咲を100パーセント愛しているのか正直に問えば僕は、答えに苦しむことになる。

100パーセントの愛情なんて存在するのかわかさえ判らないが。恋愛関係に利害関係はないといえればそれはまったくの嘘になる。

美咲は僕を愛してくれる。僕も美咲を愛している。美咲の両親も僕の両親も僕たちの結婚を待ち望んでいる。

しかし美咲との結婚は美咲自身だけではなく、美咲のバックグラウンドもすべて背負わなければならないことになる。

僕にはそれが重荷だった。それと同時に偏屈な性格の僕は単純にB級恋愛映画のサクセスストーリーの主人公にはなりたくはなかった。

だから、僕は結婚までの一步が踏み出せずにいた。踏み出せないまま2年が過ぎた。

別に美咲の事を嫌いになったわけではなかった。激しく燃え上がる感情がただ萎えただけ。

人はだれしもそんなに長期間何に対しても、激しくエネルギーを燃やし続けることはできないだろう。自然の流れだ。

思いがけなく空いてしまった土曜日の午後。僕は開放感に満ちてい

た。部屋の掃除を済ませレンタルビデオ屋へ行きDVDを3本借りて来た。ソファーに沈み込み映画を3本立て続けに見た。3本目の映画は退屈過ぎて眠りを誘った。

気が付くと日が陰りはじめていた。僕はソファーから起き上がるのも億劫だったので、灯りもつけずにつまらない映画の映像をただ見続けた。部屋の中が次第に薄暗くなっていた。

お馴染みの灯油屋のオルゴールのメロディーが流れ出した。

月の沙漠。月の夜、らくだに乗った王子と姫が広い砂漠をひとすじに對の駱駝でとぼとぼと砂丘を越えて行く。いったい何処へ行くのか。なんて悲しい曲なのだろう。ぼくは子供の頃からこの曲が大嫌いだった。夕暮れ時にこの曲を聴かされると底なしの真っ暗闇に突き落とされるような気になった。

灯油屋の曲はいつまでもしつこく僕の耳にまとわりついた。太陽が沈むころ、空が青から深い群青色に変わる。遙か彼方の西の空は紅に染まり大地の果てを黒く映し出す。僕は言いようのない恐怖感に捕らわれる。

それは突然やってくる。群青の空の所々に亀裂が生じ、その裂け目から魔物がやってきて真っ赤な舌ペロを出し僕を死の世界へ誘う。この真っ暗闇の魔物につかまったら暫く僕は堪えようのない恐怖から逃れることもできずに、怯え続けなければならないのだ。自律神経は掻き乱され、呼吸が荒くなり、不快な汗が背中を伝う。手足が冷たくなる。

それは突然やってきた。

僕は頭から毛布を被りソファーの中にうずくまった。耳を塞ぎガタガタと震えながら恐怖が過ぎ去るのを待った。

突然インターフォンが鳴った。僕は立ち上がることもできない。それは何度も何度も繰り返して鳴らされた。まるで僕が此処にこうし

ているのを見ているかのように。

僕はやっこの思いでソファから這い出し、玄関に向かった。ドアを開けた。

美咲が立っていた。僕は救われる思いがした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2779d/>

トロピカルナイト

2010年10月11日20時03分発行